

Title	被服の美
Author(s)	元井, 能
Citation	デザイン理論. 1968, 7, p. 98-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52489
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

被服の美

元 井 能

被服の美について語ろうとするとき、まず、被服美の学か、被服の美学かを明らかにしておく必要がある。このことは、被服美学という四つの文字を、三字目で切るか、二字目で切るかの、単なる操作上の問題とも受けとられもするが、厳密には、必ずしも、被服美の学と、被服の美学とが同一ではないことを示す。この点に関して、関西意匠学会被服部会第一回研究例会（昭37.12.22. 於京都女子大学）において、井島会長が、「被服美学断想」と題する講演の冒頭、概念規定の項で明らかにされた。^(註1) 私もまた、井島会長の説に賛同するものであり、したがって、以下のこの点の説明は蛇足にすぎないが、私なりに理解している形として、いま一度繰返し述べてみたい。そして、この問題が被服の美を探る唯一の、最も重要な出発点であり、方法であると信じるからである。

被服美の学とは、被服の美しさについての学問的大系を樹立することであろう。被服美の学問的大系の樹立ということについて、実は二つのことが考えられる。その一つは、被服美の学問的大系を樹立するための方法乃至立場は必ずしも一様ではないからである。被服美について、社会学的立場から考察しても、被服美の学は成立しうるし、歴史的立場からの考察も可能であり、それによって、被服美の学は成立する。心理学的立場からも、さらには自然科学的立場からも、それは可能である。このように諸種の学問的領域からの被服美の解明への道が開けてはいる。どのような学問領域からのアプローチも可能であり、

それらの道はいずれも成立しうるとはいいながら、自ずと、諸種の学問的立場のなかで、被服美を説明するための有利な立場というものはいくつもある。諸種の学問的立場を包摂するような学問的立場も考えられる。哲学が学の学としての意味をもつとすれば、被服美の説明には哲学的領域からの方策が、全体をおおう立場として選ばなければならないことは当然である。諸種の異った学問的領域のなかにあつて、被服美の全体に視野の及ぶ方法としては哲学的説明の外に道はない。したがつて、被服美の学は被服美の哲学的領域からの説明に尽きるといふわけで、被服美の哲学的説明という学問的立場は、とりもなおさず、美学的説明ということになり、被服美の哲学的説明とは被服美の美学的説明ということになる。被服美の学とは、所詮、被服美の美学的説明でなければならぬことになる。その二は、被服美を説明するにあつて、被服の美が成立するためには、まず、被服の何たるかを知らねばならず、ただ単に、被服の美をとり出すことは不可能であり、被服の美と美的以外のものとの区別を、いひかえると被服全体に視野を向けて、被服の何たるかを明らかにすることの内に、被服の美を探らねばならない。被服の美に先立つて、被服への哲学的説明を試みることのうちに、被服の美を求めることがあれば、それを、被服の美学と呼ぶべきであろう。このような理由から、被服美の学は美学でなければならず、被服美の説明は被服の美学でなければならぬ。

被服の美とは何か、を説明する唯一の道として、被服の美学的考慮を提示したわけであるが、しからば、美学的方法とはどのような方法をいうのであろうか。さらには美学とは、という問題の解決を、まず、果すべきであるかも知れない。けれども、美学の何たるかをわずかな言葉で説明しつくすことは、私自身の能力の限界を超えることでもあり、不可能である。かといつて、いままで、全く、美学について知る機会をもたなかつた人びとに、美学についての誤解があつてはならないと思ふので、美学の領域を直接示すというよりも、間接的

に、美学の領域に属さない諸点を示すことによって、誤解への道から守ることにしよう。

美学についての、第一の誤解は、美学が美の学である限り、美をつくり出すための有効な方法を示すものである、と解することである。俗に、「おしゃれの美学」とか「化粧の美学」とかの文字を見受ける。おしゃれの美学にしたがうことによって、おしゃれが可能になったとしても、それが美学的であったのではないし、美学ではない。そのような形で美への道を開くものが美学ではありえない。趣味を高尚にしたり、趣味を洗練させることが美学の目的ではないからである。カントの言葉を引用すれば、「美的判断力としての趣味能力の研究は、ここでは趣味の養成及び精錬を目的としているのではない」ということである。美的判断力としての趣味能力の研究とは美学的立場、あるいは美学といいかえてもよい。皮肉な表現を用いれば、美学では、美しいものをつくり上げるための最も良き方法を教えることはできないということを示しているのである。

(註2)

その二は、美学についての第二の誤解というよりも、美についての偏見のために生じる誤解というべきものである。美についての偏見の主なもの、美をあまりにも狭義に解することから生じる。狭義に美を解することの第一は美を優美とのみ解することである。自己のもつ美のイメージと美学が対象とする美との不一致から美学への不信が抱かれるようになる。美的範疇あるいは美的類型として、崇高、悲壮、優美、滑稽と区別されて考えられる。また、このような区別が西欧的であるとすれば、日本の美的範疇として呼ばれている、わび、さび、あわれ、幽玄^(註3)、いき^(註4)などと優美とは区別されるし、それらを美と呼べないことはないはずである。このように見えてくると、被服の美について考えようとするとき、まず、その美が狭い固定化した意味での美でないことが望まれるし、そのような被服美への考察が被服美学に求められる道といえよう。

被服の美について考察の道は被服全体に視野をひろげて始められなければならない。被服とはどういうものかという間に答えることから始めなければならない。けれども、この間は同時に、被服の美に至る道でなければならない。そこで、私の選ぼうとする道は、(1)被服の起源論と機能論をのべ、(2)被服における身体の問題、(3)被服と流行、である。

(1)被服の起源論と機能論

「服飾の本質に関する議論は従来その多くが起源論の形をとって提出されて来ている。」^(註5) 私もまた、被服の起源論をのべることによって、被服はなぜ存在しているかをのべようとする。被服の起源論と被服の本質の解明とは必ずしも同一ではない。私は被服の起源論を借用することによって、その本質を見ようとするのである。したがって、起源論に重点をおくのではなく、中心問題は被服とは何かを探ることである。

被服の起源論は人類の始原形態における被服の在り方をさぐることであり、その方法として、始原ならびに未開の民族における被服からその動因を探ることが一つ。その二は、起源論を手がけたのは、まず、西欧社会においてであり、西欧社会の精神的支柱としてのキリスト教的な考え方、いいかえると、聖書の教説からの解釈が支配的である見解に、被服発生理由を求めたものである。これらの方法から、羞恥説、呪術説、身体保護説、標章説、装飾説などがみちびき出されている。

ここで、被服の起源論について了解しうることは、人間がなぜ被服をもつに至ったかの理由を一つにしぼることができず、また異った民族、異った地域における被服発生理由も一律でないことである。要は被服の起源論をさぐって、被服がさまざまな発生要因をもつことを知る。このことは、現代に視点を置いてもいえる。いわゆる、被服のT・P・Oとよばれている事柄が、学問的根拠とは無縁の言葉であろうとも、事実として存在しているし、被服の多元的機能を

示している言葉であることを否定することはできない。

歴史に遡って、被服の起源論に視点を向けても、眼を現代に向けて、被服の存在の様相をながめても、いずれの場合にも、被服が機能を装飾に支えられて成立することに注目することができる。被服の意味を集約すれば、機能と装飾に尽きるわけで、この両者の関係の上に成立する点からの考察の道以外、被服の本質を知る道はない。ついでながら、被服の起源から現代に至るまでの、被服の歴史的展開を省略した形で述べたが、それは、被服の歴史的側面からの考察を意味なきものと思うからではなく、むしろ、その反対に、歴史の流れのうちに展開されている被服の意味の重要性を強調するものである。この点に関しては、被服における身体の問題としてながめよう。

(2)被服における身体の問題

被服は文字どおり、われわれに身近かな存在である。身体をはなれて被服を考えることは無意味である。身体を場所とせず被服は成立の場をもたない。ここでいう、身体とは、肉体や人体とは区別した言葉として用いたい。というのは、肉体や人体という表現は人間の心とからだとを区別した一方の意味しかになわないからである。被服が着用されるのはたしかに、人体であり、肉体であるかも知れぬ。しかし、その場合、生きている人間のからだを指し示しているか否かの疑問が生じる。例えば、生体という。恐らくは医学用語であろうが、それは死体に対して、生きている人体を意味してしよう。しかし、医学の対象、というよりは、解剖学的、すなわち、自然科学的対象としてとらえられる人間のからだのことであって、歴史的、社会的存在としての人間の身体を意味するものではなからう。

被服の美をさぐるときに、自然科学的な意味での人間のからだという見方は、一応、除外して、歴史的、社会的存在としての人間の身体、考え、行動する人間のからだを対象として考えられていなければならない。このような立場から、

人間のからだを意味するものとして身体という語を採用するわけである。

フランスのシャルトルの本寺西正面に、その円柱を飾る人物像群が石にきざまれている。この彫刻像は十二世紀中頃の作といわれている。これらの人像は旧約聖書にでてくる人たちを表したものとされているが、きわめて長身の人像である。現実の人間像とは比較にならないほどの長身である。それは柱という長さをもったものの部分を飾るから、このような長身にされているともいえる。このような理由づけは別として、これら男女の人物像は気品に満ちた美しさを見る人に与える。

被服における身体は、ある一定の理想的形態を設定しがちであるが、シャルトル本寺のこれらの像は、この被服における身体の固定した理想像の観念を破るものといえよう。人間の身体的理想像は固定したものでないことを示すものといえよう。

ヨーロッパの中世では、人びとの精神的支柱はキリスト教にほかならなかった。キリスト教にあっては、現世的肉体よりも魂が重じられた。それは造形の面で、現実の人間形態の型を軽視し、それよりも、精神的深さを示す形態につかした。その結果が、シャルトルの円柱彫像の形として実現しているわけである。

ところで、現代に眼を向けるとき、およそ、ヨーロッパ中世的身体像は無視されることであろう。ルネサンス以降、人間解放の歴史が開かれ、その支えとして、古代ギリシャ・ローマの古典主義の観念が支配的となっている。その結果、被服における身体的理想像も、古代ギリシャ彫像のそれにひかれがちである。勿論、このことは否定さるべき考えでもなければ、非難されるべき筋合のものでもない。しかしながら、古代ギリシャ的人間身体の均衡だけを唯一の理想像とし、それのみにたよって、身体のプロトタイプと錯覚し、その上のみ築き上げていられる被服であるとすれば、被服の美の成立は必ずしも樹立できるものではなからう。

被服における身体の問題として、身体の形態的側面を述べたわけである。どのような形態の身体が選ばれなければ、被服の美に至りえないかという問題ではなく、歴史的存在としての人間が、自己の生きている時代にもっとも忠実に生きている姿として選ぶべき身体のみが、身体の被服における理想像というほかはない。

歴史の語るヨーロッパ中世が、キリスト教的精神に支えられていたことの論証は、人間の身体の形態的側面だけではない。被服を肉体や人体とは区別した身体とのつながりから眺めようとする以上、生きた人間が着用するものとしての被服でなければならない。生きている人間がその身体に着用するかぎり、被服はその着用方式、着方という面からながめることを要求される。キリスト教的観念は被服において、肉体をつつみかくすという着用方式をえらばせている。「人はパンだけで生きるものではない」。魂の、霊の尊厳を教えているキリスト教にあっては、当然に、現実の肉体を醜いものとし、それをつつみかくすことを教える。その結果が、被服の着方につつみかくす方式をとらせたのである。これに対し、古代ギリシャ人にあっては、被服はまとうべきものとした着用方式と根本的に異なるところである。そして、それは、われわれの和服の着用方式とも異なるといえよう。

「馬子にも衣裳」という言葉がある。逆にまた、「衣裳つけても馬子は馬子」ともいわれる。二つの言葉は馬子と衣裳との関係を全く対照的に言いあらわしている。馬子と衣裳とを、人間と被服とに置き換えてみると、甚だ興味ある見方が可能となる。前者、「馬子にも衣裳」は、いやしい身分の者も、豪華な衣裳を着ることによって、いやしからぬ姿となる、と解しえよう。後者は、所詮、身分いやしき者はどのような衣裳をつけて見ても中味は変わらない、との意味である。人間と被服に置きかえた場合、前者は、被服によって人がかわる、ということになる。これに対し、後者は、どの被服をつけても人はかわらない、ということを示す。しかし、後者の真意は、被服の力を借りて、人為的にかわる

うとする人間の心のいやしきへの戒めの言葉と解すべきであろう。あるいは、誤った被服の着用の無意味を指摘して、被服における虚飾という倫理的見解であろう。しかしながら、前者は、誤った被服の着用方式の無意味さに対する、正当な被服の着用ということではなく、着用されることによって、始めて生じる被服の意味を示唆しているともいえる。被服と身体、というよりも、被服と人間との関係を、着用という動作のうちに成立せしめる。被服の性格を表現している。いいかえると、或る被服を着用することによって、その人間の心情に変化がもたらされるし、被服はそのような、人間の心情を変化させる能力を内に蔵しているともいえる。^(註6) というよりも、着かえることによって、人間はそれぞれの姿をあらわす。被服によって、人間は自己自身をあらわにしている、といえよう。さらに説明を加えると、スポーツ着を着ることによって、われわれは活動的に向う心情をもちうるし、礼装を着ることによって、厳粛な儀式に列する心の用意ができる。このような日常的体験のうちに、被服と人間の有機的関係を知りえている。被服の機能を考察するとき、肉体的意味からの機能のみならず、精神的作用をもつものとしての身体の機能にまで及ばねばならないことは当然である。被服における装飾性は被服と精神をもった人間からしか生じない。

(3)被服と流行

時の流れのうちに生きる人間のつくりだすものとしての被服である限り、被服は歴史的意義をになう。被服を歴史的に考察することのうちに被服の意味は把握することができる。しかし、被服について、歴史的な時の流れと異った時点のあることにも注目しなければならない。歴史的な時の流れよりも、より急速とみられる時の流れを無視することはできない。それは、時の流れのなかで、季節とよばれるものである。流行とも呼ばれるもので、季節という、特殊な時の流れである。歴史的時制との相違は、急速という点であるが、それが、被服

に関して、その性格の一面をあらわす。

流行とは、歴史的時間と異った、季節という時間性を背景にしている。そして、流行とは一つの社会現象をあらわし、被服について、「商人の創意」という外的条件の支配をうけもし、「着物をきるという芸術のいわば質料のようなものである。」^(註7)と。

私が、ここで、被服と流行の親密性をとりあげるのは、服飾雑誌や日刊新聞などで取りあげている形で問題にしようとしているのではないことをまずことわりしたい。さらにまた、それらの記事の根拠が、資本主義乃至商業主義的体制の必然的所産であって、被服の美と全く無縁であるとして、斥けようとするのでもない。被服における流行が商業主義政策に毒されているのも事実であるが、かといって、そのために、被服における流行現象を抹殺し去ることができないのも現状である。

若しかりに、私が、「流行にしたがいなさい」と言えば、あるいは、若い人たちからは、「今さら何をいうのか」と反問されよう。あるいは、思慮ありげな年配の人たちから、「とんでもないことをいう」と反対されるかも知れない。流行に関して、どちらかといえば、若い年令層に多くの賛同があつまるであろうし、若くない年令層からは反対にあう。しからば、被服における流行は若年層においてのみ成立する事柄といえるであろうか。反省力に乏しい若者の尖鋭の様相のみが流行であると見る、道学的見方からは、確かにそのような解答も生じよう。けれども、尖鋭的な、奇異とすらうつる様相だけが流行という意味でとらえられるとは思えない。その理由は、被服における、より急速な時の流れ、そのあらわれとしての季節を無視しえないためである。源氏物語にあらわれている、「更衣」という言葉をまつまでもなく、被服成立の条件として季節をもちこまねばならぬ以上、被服成立の場として、季節は存在するのであり、季節を場とする限りにおいて、流行という、単なる現象ではなく、諸原因を内包した条件として、関係をもつものである。

被服は季節に応じてつくられる。季節に応じてつくりかえねばならないとき、どのようにつくりかえても良いというわけではなく、一様の方向をとろうとする。それが流行である。それは規制ではなくて、あくまで、一つの方向を示す指標にすぎない。そして、それを示す者は、必ずしも、商業主義の先鋒ではない。すべての人が参画して示す指標が流行とよばれるものである。

「流行の美的なところは、無闇に人の注意を惹くことがないという確信によって、安堵とゆとりが与えられる点にある。」とアランは説明している。さらに、「流行に従うことは、だから一つの国語を知ることである。」ともすべて奇異な姿、特異な姿を見せる被服の着用を流行とは見ず、一様化に向うことのうちに流行を意味付けようとする。かくして、「流行は自然と様式に赴く」という。被服の流行は、歴史の時の流れに組入れられて、様式をうちたてるものである。

- 註 1. デザイン理論第2号、学会報告P98及び、繊維製品消費科学機関紙第3巻、第6号総説「被服美学断想」P.300参照。
2. カントの判断力批判、第一部、第一篇、第34節は「趣味の客観的原理は不可能である」と述べている。(訳書、岩波文庫本P.198。)
 3. 大西克礼著、「幽玄とあわれ」、「風雅論」。
 4. 九鬼周造著、「いきの構造」。
 5. 谷田閑次著「生活造形の美学」P.173。
 6. アランは芸術論集のなかで、「衣裳もまた人間を支えるのだ」。(桑原武夫訳書P.97)と述べており、同一の意味内容として了解を乞う。
 7. アラン著「芸術論集」P.92。